

本紙に新聞協会賞 8年連続35件目

日本新聞協会は6日、優れた報道に贈られる2023年度の新聞協会賞を発表した。毎日新聞西部本社編集局写真部兼那覇支局・喜屋武真之介記者(38)の「『伝えていかねば』 沖縄・渡嘉敷島 集団自決の生存者」など5件が選ばれた。毎日新聞の報道が受賞するのは8年連続35件



沖縄集団自決 生存者の写真

目で、最多記録を更新した。

(11面に特集、社会面に関連記事)
戦後78年となり、当時を知る人が少なくなる中、喜屋武記者は今こそ戦争の悲惨さを伝えたいと太平洋戦争末期の沖縄・渡嘉敷島であった、いわゆる「集団自決」の取材を進めた。3月、島で開かれた慰霊祭で生存者を知る参列者と出会い、後日、生存者の男性にたどり着いた。

取材を受けたことがないと話す男性は、米軍が迫る中、父が家族一人一人に木の棒を振り下ろしていったと証言した。奇跡的に生き延びた男性の頭には傷が残っている。人前で帽子をかぶり続けてきたが、喜屋武記者は了解を得て帽子を取った姿をカメラに収め、写真、埋もれていた史実を78年ぶりに明らかにした。

新聞協会は「生存者が少なくなる中、戦争の悲惨さと愚かさを圧倒的な表現で伝えた写真報道として、新聞協会賞に値する」と高く評価した。